

「安心できる居場所」と「心の余裕」

清瀬市立清瀬第六小学校

六年 鈴木滋大

「おはよう。きみ、二組の鈴木君だよ。名前、もう覚えたよ。」

と声をかけてくれた六年生は、一年生だったぼくに優しくほほえんでくれた。

これは、入学して間もない頃、学校の昇降口で行われていた「あいさつ運動」での一コマだ。身体が大きく、ちよつと怖いな、と感じていた六年生の印象が、この日を境に、ぼくにとっては頼もしいお兄さんに変わった。

今、ぼくは学校の最上級生となり、一年生のお世話係などを通じて、下級生にはなるべくたくさん声をかけるように心がけている。ぼくが六年生にかけてもらった一言で、学校に行くのがより楽しくなったように、あいさつや声かけは、人との触れ合いの第一歩で、大きな力があると思うからだ。ほんの少しの会話のやり取りであつても、人と言葉を交わすことで、そこに自分の居場所を見つけるところができ、心の余裕につながっていくのではないかと、ぼくは感じている。

しかし、誰にでも気分が落ちこんだり、イライラして、心の余裕がなくなってしまうことはあるだろう。ぼく自身、学校で起こった友人との出来事に、心の浮き沈みを感じたり、イライラした気持ちを、弟にぶつけてしまうこともある。

うちの母は、ぼくと弟に加え、まだ一歳の妹の三人の世話をしてくれている。

父は仕事で深夜に帰宅することが多いのだが、たまに父が早く帰ってくると、母は

「あー、助かった。ほつとするよ」

と言う。どういふことか母に聞くと、子育て中のストレスなどで、心に余裕がなくなってくると、気持ちがいっぱいになってしまいうさうだ。ところが、父に話をじっくり聞いてもらえるだけで、だいぶ気持ちが落ちついてくる、というのだ。

ぼくは以前、「子ども食堂」を取り上げた、あるテレビ番組を見た。すると、ぼくと同じくらいの年齢の男の子が、暗い表情で映っていた。その子は、お父さんと二人暮らしだが、仕事で忙しいお父さんとは話をする時間がなく、家では一人きりで、買ってきたものを食べて過ごしていた。その彼が、地域にできた子ども食堂に、誘われて初めて足を運んだのだ。食堂のスタッフの人は、彼にあれこれ聞いたりせず、温かいご飯と一緒に食べ、いつも行く度に優しく見守っていた。そのうち男の子は、少しずつ、自分のこと、家や学校のこと等を話し出し、表情も明るくなっていった。番組の中で彼は、

「やっと自分が安心できる居場所ができた」と語っていた。

ぼくは、母の話やこの番組を見たことで、大事なことを教えられた。あいさつや、声をかけて言葉を交わすことも大切なことだし、一方で、声をかけるだけでなく、母が、父に話を聞いてもらえるように、じっくり耳を傾けて話を聞いてもらうことは、心の余裕を取り戻す上で、大きな力をもつのだと気がついた。さらに、この男の子のように、誰かに寄りそってもらい、無条件で自分を受け入れてくれるような人に出会うこと、言いかえれば、相手に安心感を与え、心の扉を開けてもらえるような存在になることは、とても貴いことだと感じたのだ。

自分が安心できる居場所があり、言葉を交わせる相手がいるということは、実は本当に恵まれている環境なのだ、ぼくは思う。逆に言えば、そういう環境を家庭でも地域でも着実に作っていくことが、犯罪や非行を防止する上で大事なのではないだろうか。

そして方が一、悪い方へ進んでしまった人がいても、声をかけること、話を聞いてみることに、地域の中でありのままを受け入れようと努めること、こういった意識と環境があれば、きっといつか、その人は変われるような気がする。

ぼくは今回、母の話なども聞きながら、この先どんなことが自分にできるかを考えてみたが、これからは、しっかり人の話が聞ける器を持った人になりたいと、強く思うようになった。